

序　霑然たる回顧の始点

遠来が轟いた。

にわかに強まつた兩足に急かされるようにして、保科は目を開けた。鼻腔に流れ込んでくるのは夏の空氣に違いない。

はて。今はもう冬だと思ったが。

保科は違和感を覚えたが、しかしよくよく考えてみると、どうして今は冬だと認識していたのか定かでない。

「夢でも見ていたかい」

籐椅子でゆつたりと文庫本を読んでいた木野崎が顔を上げる。

「ああ、どうもそうらしい。これが夢の続きでないと定義するならばね」

保科は座のうえに胡坐をかき、頭も搔いた。意識をはつきりさせようというのだろう。しかし彼の知覚はもはや夢の世界の情報を参照することはなく、床板のほどよい凸凹や、雨どいから滴る水が砂や石を打つ音、そして保科の寝起きを観察する木野崎の微笑みを認識させ、異界との断絶を完璧なものとする。もう、どんな夢を見ていたのか、思い出せない。

「夢でもいいさ。おおいに結構。こうしてまた君とゆつくり話せるときが来るなんて、俺は夢にも思わなかつた」「うん、同感だ」保科は卓袱台に置かれた水差しに手を伸ばし、中身の麦茶を、同じく卓袱台に用意されていた

ガラスのコップに注ぐ。「何年ぶりだらう?」「

「それは、意味がある問いとは思えないな」

木野崎は微笑みを絶やすことなく保科を見つめている。

「同感だ」麦茶を一息に飲み干してから、保科は前の言葉を繰り返す。

ふたりは座敷に面した縁側にいる。卓袱台は座敷の端に引き寄せられ、脚のひとつが障子とぶつかっていた。臨む庭には風流なことに紫陽花が植えてあり、それは雨に打たれながらも仄かな彩を提供している。竹垣があればなお趣があるだらうか、と保科はぼんやりと考える。

「風鈴が、ちりんちりん、と鳴った。」

保科は回顧する。まえにこの景色を眺めたのは、まだ小さな子供の時分だった。卓袱台は今よりもずっと大きく感じられた。当然だらう。ここを出てから、実にいろいろなことがあった。さまざま人に出会った。

「最大の転機は……」

「西暦一九九九年八月」

「いや、僕が言いたいのは」保科は掌を見て木野崎を制す。「僕個人、保科晃にとっての始まりだ。それはやはり、一〇〇六年の春だつたと言えるだらうな」

「ふむ、神楽くんか」木野崎は手にしていた本に手を挟み、籐椅子の手すりの脇に置いた。「元気にしていろかな」

「君も会つていない?..」

「永らく」

「それは彼女が幸福であることの証だね」

「同感だ」

木野崎が保科の言葉を借りた。

「もしも彼女に会わなければ、今ここで、君に見守られながら昼寝をしていることもなかつただろつ。あの田を境に、僕は新たな世界に踏み込んだ。君のいる世界に」「それは逆だ。君が踏み込んだ結果、今の俺が生じた。君は俺によつて定義されたが、俺は君によつて規定されるんだから」

木野崎が言つと、保科が笑つた。

「それ、初めて聞かされたときには、全くチンパンカンパンだつた」

「申し訳ない。巧い諭えが浮かばなくてね。まあ、どどんつまり、君にとつての始点が、この俺にとつては支点になつてゐるつてことだ」

「今はよく理解できるよ」

「だらうね。当時は誰かさんにひどく心配されたが、いい搭配に収まつたもんだ」

「ヒトにはそういう能力があるつてことさ。これは、僕の友人たちが証明してくれたことでもある」

「もちろん、俺もそれは知つてゐるさ。江藤、ライゼンベルガー、宇都、深坂、夜宮、神巖、清胤……。」

い人々だ。しかし、今ではもう余れる人間は数少ない

「ずいぶんと時が流れた」

「ああ、本当に。そしてこれからも流れ続けることだろ

う。それもまた彼らのおかげだ」

「それは幸せなことだらうか」

「観測者次第。つまり、君や俺がどう思つたかといつ」とだ」

「どう見るか。どう捉えるか……。まさしく宇都先生の

お言葉どおりだな」

「だろう?」

堪えきれず、ふたりは声をあげて笑つた。笑う客観的理由などなかつたが。

雷鳴も雨音も、もう聞こえない。ふたりが庭に目をやると、竹垣に添つて植わつた紫陽花の葉と花びらとが、雨滴を宝石のように身に纏つているのが見えた。

そう、彼らは観測者。この露然夢苑の住人にして、私がこれから残そつとしているすべての記録の情報源。

彼らの会話を聞く者はなく、彼らの姿を見る者はない。だから私は残しておくだ。彼らの言葉を。思考を。感情を。その器に刻まれたあらゆる履歴を。漏らさず書き取つていこう。

言語という媒体に、正確な情報伝達を期待できないことは重々承知している。しかし、たとえ無為に思える手段に抛つても、可能性に託すしかないのだ。私にでき

ることはこれしかない。無限に円転する時空のなかで、彼らの存在を夢幻とせぬために。

歴史に埋もれし人の記憶。私は、ただそれを明らかにし、鏡のように映し出していこう。

鏡は自らを映さない。だから私は、これから作業において自らの名を記述するつもりはない。

しかし、ここは始点であり終点。

アルファでありオメガ。

ゆえに、ただここにおいてのみ、私はその名を刻んでおこう。

私の名は

。